

〈論文〉

W. B. イェイツの詩的インテグリティについて —— ‘*Under Ben Bulben*’におけるその関係の相 ——

戸 村 保

I

イェイツの詩の特性に「驚異的な芸術的全体像」^{註(1)}があげられる。彼にとって、1938年1月から1939年までは *annus mirabilis* であり、この期に *Last Poems* を完成し、さらに *On the Boiler*, *Purgatory*, *The Death of Cuchulain* をも書いた。これらの作品には主題と観念形態に一定の相互作用がみられる。

イェイツは‘*Under Ben Bulben*’をテーマの再述としてではなしに、一序章と考えたかったようで、その進展には劇的效果も備わっている^{註(2)}。‘*Under Ben Bulben*’は‘*The Municipal Gallery Revisited*’, ‘*The Man and the Echo*’と三篇のなかで最も intelligible であるといわれた。‘*Under Ben Bulben*’とその Epitaph は、遺言と意思表示のみならず、過去の筋道の手網がしっかりと引き締められている。Epitaph は偉大な詩でなく、広範囲にわたる瞑想詩とみなされる^{註(3)}。‘cold eye’は貴族的冷静さと笑いで、coldness が芸術上の完成の理想にたいするイェイツ特有の語である。

‘*Under Ben Bulben*’は、イェイツの death poems のなかで cant and rant の構造を孕み、大半が a poor poem である。大げさな話しぶりで彼の想像力になる遺産にこれを含められるかどうか分らない。それは読者が決めること、新しい主題は無く *Last Poems* のなかの多くの思念と心像の要約である^{註(4)}。

cant and rant は‘rant and rage’を想起させる。もじりのひびきもあろう。ともあれ、つぎは豊かな詩想が明らかにことば巧みに (cajoling) うた

われている。

For the elemental creatures go
About my table to and fro,
That hurry from unmeasured mind
To rant and rage in flood and wind;
Yet he who treads in measured ways
May surely barter gaze for gaze.
Man ever journeys on with them
After the red-rose-bordered hem.

—— To Ireland in the Coming Times II ——

つぎの第三連の最後を quatrain として読む場合に一つの formula があることに気づく。

I cast my heart into my rhymes.
That you, in the dim coming times,
May know how my heart went with them
After the red rose bordered hem.

—— To Ireland in the Coming Times III ——

‘*To Ireland in the Coming Times*’は “*The Rose*” (1893) の epilogue で、the dim coming times に包含される相互影響が ‘*Under Ben Bulbin*’ (September 4, 1938) へ proleptically^{註(5)} に及ぼされている。ここにみる ‘that [pronoun] may [verb]’ 構文はイエイツの用いる formula の支柱であろう。

このような構造の前提の認識は、イエイツの ‘A poem is an elaboration of the rhythms of common speech and their association with profound feeling.’^{註(6)} である。そして ‘*Under Ben Bulbin*’ は、「完全なものの構想」^{註(7)} (a vision of completeness) を志向するための具現と劇化である。

II

イエイツは抽象概念が整い、それが具象や劇化できたときにかぎり満足できたが、悔恨が彼の初期の詩歌を損じたと考えた。彼は芸術以外の目的にする知力を認めない。青年期の知力には未来の真実を包含するものがあると信じた。「節度のない発言をした悔恨」になると、熱狂的な心が彼の活動の中心を占めるようになったのである。

Out of Ireland have we come,
Great hatred, little room,
Maimed us at the start
I carry from my mother's womb
A fanatic heart.

— Remorse for Intemperate Speech III —

大きな憎しみによる屈辱感の昇華が、リフレインの fanatic heart であろう。この言い回しは My fanatic heart から A fanatic heart への包括的な変容を経ている。イエイツは‘I am a fanatic.’^{註(8)} のマスクを演じたことがある。彼が受け入れる最有力な意見がなく自分がやばで退屈者とはじめて知ったときに、後に忘れ去ったが a patter を案出し、暢気者の偽善と少々の悪意をうまくやってのけた。彼が fanatic たることは友人たちには分らなかった。この「熱狂的な心」は彼の「仕事」にとって不可欠のものになっていった。

憎しみはアイルランド民族の心にとって生来のものである。アイルランド人ほどにひどい迫害を受けた国民はいない。現代までその迫害は止まない。そんな過去がいつも身内に生きている憎しみはほかの国民にはないことである。憎しみが彼の人生を毒し、憎しみにふさわしい表現をしなかったことで自らを非難するようなことがあった。漂泊の農民詩人の口を借りてそのことを語るくらいでは足りない。

イエイツはお歴々を手本にしたが彼らの言行にたいして彼の熱狂的な心は満足できず、先祖に彼の所業の判定を求める。

I call on those that call me son,
Grandson, or great-grandson,
On uncles, aunts, great-uncles or great-aunts,
To judge what I have done.
Have I, that put it into words,
Spoilt what old loins have sent ?
Eyes spiritualized by death can judge,
I cannot, but I am not content.

— Are You Content 1 —

死んで霊化された眼には判断できるにしても、ことばを生業としている彼自身にはできない。満足は根源探究と自己の運命に寛大になり悔恨を捨て去ることができれば、自我と霊が陽気になれるのであろう。

I am content to follow to its source
Every event in action or in thought;
Measure the lot; forgive myself the lot,
When such as I cast out remorse
So great a sweetness flows into the breast
We must laugh and we must sing,
We are blest by everything,
Everything we look upon is blest.

— A Dialogue of Self and Soul II —

人間は真理を体現することはできても、真理を知ることにはできない。彼は人生を終えるときには真理を体現しなければならないし、抽象的なものは人生でないののでいたるところで矛盾を生ずると述べた^{註(9)}。彼は平和に人生を終えることよりも人間の本性である争いの考えを重視し、惰性を恐れたので平穩も懸念した。対立するものを探求して自己の芸術に迫力を保持し自己の死を基にさらに強い生に執着した。対立があってその中からはじめて新しいものが生まれるものは一般的な真理である。

III

イェイツの死の5か月前の書簡^{註(10)}に、‘I have written a long poem called [illigible] which you will like...’の内容が書かれ、その書簡集の注によると ‘This poem was finally called ‘*Under Ben Bulbin*’. It was published after Yeats’ death in the Irish Times, February 3, 1939, and in *Last Poems*” と記されている。

Dorothy Wellesley に宛てられた書簡^{註(11)}には、‘Draw rein; draw breath./Cast a cold eye/On life, on death/Horseman pass by.’とある。これは後に形を改めて再現された。末行はイェイツ自ら epitaph として書き詩題は‘HIS CONVICTIONS’であったが、完成詩は‘*Under Ben Bulbin*’の題のもとに *Last Poems* に収められた。

さらに Ethel Mannin 宛^{註(12)}に、彼自身が、埋葬地とスライゴーの人里離れた故郷の曾祖父が教区牧師であった教会付属墓地を定めた。名前、生没年と‘cast a cold eye/on Life, on death;/Horseman pass by’の詩行のみでよいと考えられた。

Turn that indifferent eye が Cast a cold eye, に直された。‘Draw rein, draw breath’が epitaph から省かれたことが個人として惜しまれたり、(Jon Stallworthy)^{註(13)} 省略は必要であるとの見方もある (Curtis Bradford)。

‘His Convictions’ (Creed) の散文の最初の草稿は8月に書かれ、最終版はイェイツがアイルランドを去る前夜、T. R. Higgins に音読したものであった。彼のアイルランドへの確信は、自国をテーマにすることが根幹であり、詩歌が民族の遺産の高い水準に達し、国民的な本来の神話を再考することであった。神話が詩にとって有用なのは、個人的経験を公的に、公的事象を自己の洞察により個性的なものに再創造のうえその心象が象徴を借りて真実を暗示させる場合にある。

イェイツは、あと2, 3世紀もすると機械的理論が現実性もなく、危険な狂信を逃れるためには全く新しい科学を学ばねばならず、このことは一

般に知られるようになってそのときドルーイド教を背景にして一人のキリストのなかに魅惑的ななにものかを見出すことになろう、と確信した。生まれてからこのような信仰をもち、その信仰のなかに生き、その信仰のなかに死んでゆくであろうと彼はいう^{註(14)}。

Ben Bulben への具体化は、イエイツの確信、信仰、意識的・無意識的精神生活全体と彼の霊の探究のドラマを合わせもつ心情と remorse, hatred, conflict 三要素を絡めて形が与えられた (cast) のであろう。

‘*Under Ben Bulben*’ (1938.9.4) と並行して‘*The Statues*’ (1938.4.9) がつくられていた。そこには芸術家の盛衰について未来にたいする二律背反的見とおしが立てられ、芸術の形成力が力説されている。

We Irish, born into that ancient sect
But thrown upon this filthy modern tide
And by its formless spawning fury wrecked,
Climb to our proper dark, that we may trace
The lineament of a plummet-measured face.

— The Statues IV —

この汚れた現代の潮は、夢の連想や個人的感情を拒み、個人的知性をもつと知的にせんとして民族の魂を奪っても詩歌でありうるような現代の世界を象徴している。現代の不一致が現実具体化している無様な建物、工場、大都市、ネオンサイン一切が、イエイツの身内の暗闇から漠然と憎悪の対象になる。そのような憎悪が強まるのは、彼が薄暮れにオコンネル橋に立つとき、冬の夜明けにベンプルベンを背景に駒を走らせるありさまを想像するときである。「アイルランド風」であるものに加わるイエイツの確信は慣れよりももっと深いものなのである。それは16世紀と17世紀を通して絶滅戦争化してしまった戦争経験であり、今日にいたるまでその古代の「鉞脈」を保存してきたものである。計測による顔の輪郭を探りだす目的をもって本来の闇という現実探究を認識する必要があるとされた。イメージとアイディア全体は純粋な統一的経験として形成されていよう。

IV

‘It is time that I wrote my will.’ (‘Tower’ V) の塔は生、逆境、思策・創作活動の場の表象として創造された。そして不条理に対応する象徴として最終の相を帯びるようになった。自己改造の信念と誇りの宣言として彼は「過ぎ去った日々」の友人たちへ心を向ける。

You that would judge me, do not judge alone
This book or that, come to this hallowed place
Where my friends’ portraits hang and looked there on;
Ireland’s history in their lineaments trace;
Think where man’s glory most begins and ends,
And say my glory was I had such friends.

— The Municipal Gallery Revisited VII —

裁定者に友の肖像がある所でアイルランドの歴史を彼らの顔立ちのなかにたどり、栄光の友がいたことを語るように求められる。イェイツの真の友は次の人たちであった。

Berkley, Swift, Burke, Grattan, Parnell, Augusta Gregory, Synge,
Kevin O’Higgins. ^{註(15)}

[untitled]

The friends that have it I do wrong
When ever I remake a song,
Should know what issue is at stake:
It is myself that I remake.

— (The Variorum Edition, p.778) —

この「無題詩」は‘*The Municipal Gallery Revisited VII*’や‘*An Acre of Grass*’の‘Grant me an old man’s frenzy,/Myself must I remake . . .’との相互解釈ができる。自己のために独力で自己闘争をすることがイェイツの本質的テーマであることから、彼は沈滞に左右されない誠実さを確信していた。It is myself that I remake (1908 年) は、It is time that I wrote

my will, Now shall I make my soul. ‘*The Tower*’ III’ (1928 年) のなかに、Myself must I remake と強調のための変形がみられる。そして ‘Imperative etc. + that~may...’ 構文が formula としての特徴になっているのは興味深い。

Irish poet, learn your trade,
Sing whatever is well made,
Scorn the sort now growing up
All out of shape from toe to top,
Their unremembering hearts and heads
Base-born products of base beds.
Sing the peasantry, and then
Hard-riding country gentlemen,
The holiness of monks, and after
Porter-drinkers’ randy laughter;
Sing the lords and ladies gay
That were beaten into the clay
Through seven heroic centuries;
Cast your mind on other days
That we in coming days may be
Still the indomitable Irishry.

— *Under Ben Bulben V* —

‘*Under Ben Bulben*’ の section ごとの展開は、騎馬の男がベン ブルベンを駆け降りる切迫さ、靈魂不滅と再生の必然性、怒りと暴力の不可欠、理想的芸術の擁護へと進み、憤怒の調子が底流をなしている。そして具体的な語りかけの section がうたわれている。この詩の主意は政治的信念表明でなく、単なる反復の周期的な時間観念でない「過ぎ去った日々」を夢みる世界のあらわれである。‘Cast your mind’ の場合も、はじめは Set your thoughts で後に末消された key phrase である。

‘other days’ は、‘certain thoughts’ を包含し芸術的完全さを喪失しないよ

うにするために、農民、地方郷土、修道士、安酒あおる者、貴族や貴婦人、友人の世界を連想させる。その完全さの目的枠組に末尾の三行が当てはまるであろう。

ある種の「アイルランド風」なるものの特質はますます大切なものとならなければならない、とイェイツは言う。「不屈のアイルランド民族」は宗教、社会、政治、文化にたいする英雄文学の表現法をとり、そして過去の文化遺産を維持できるのは‘the indomitable Irishry’のみであるということなのである。

V

‘Three Songs to the One Burden’と‘Under Ben Bulbin’はテーマもリフレインも連繫している。

Some had no thought of victory
But had gone to die
That Ireland's mind be greater,
Her heart mount up on high;
And yet who knows what's yet to come?
For Patrick Pearse had said
That in every generation
Must Ireland's blood be shed.
From mountain to mountain ride the fierce horsemen.

— Three Songs to the One Burden III —

勝利は考えずにアイルランド魂をもっと偉大にし、その心を舞い上がらせようとして出向いて死んだ者（‘Easter 1916’）もいる。「だが、これから先は知れたものか」は劇的な問いかけであろう。世代がめぐってもアイルランドの血は流れる。まさに運命の悲劇的受容である。イェイツの‘Whither?’^{註(16)}で「4, 5 世代もするか、そんなに経たなくてもこの憎しみは暴力となって出てきて、なんらかの血縁関係のルールを課すであろう。

私はそれがどんな性質のルールであるか分からない。なぜならその対立するものが光を満しているから。そのルールの出てくるのをより近づけるための私にできることは私の憎しみを強めることだけである。

このようなものが、アイルランド人の憎しみであり孤独であり、スウィフトに『ガリヴァー』を書かせ、彼自身の墓碑銘を書かせた。同じような憎しみがいまだにわれわれを極端から極端へと揺り動かせ、われわれの正気を疑わせるのである。イエイツの‘*Swift’s Epitaph*’の Savage indignation の存続が Swift haunts me; he is always just round the next corner.^{註(17)}の反映であろう。

イエイツが自分の主題を見出した 18, 9 歳の頃に影響を受けた John O’Leary は、追放の生活、立派な頭脳、学識、誇りと誠実の持主で、貴族的夢想をする性格であった。イエイツはそのころはロマンティックな文学以外はいっさい読まず、無味乾燥な 18 世紀的修辞を嫌ったが、別々の個人ではなく人々から人々に向かって語り語ろうとした詩人には一つの特質を認めている。

後期のイエイツの integrity は、‘Romantic Ineland’s dead and gone,/ It’s with O’Leary in the grave.’ (‘*September 1913*’), ‘Now and in time to be,/Wherever green is worn,/Are changed, changed utterly: A terrible beauty is born.’ ‘*Easter 1916*’から‘*Under Ben Bulbin*’の中心テーマの completeness — completeness of their passions won [1 連 9 行目], He completes his partial mind [III 連 6 行目], Profane perfection of mankind [IV 連 16 行目]までに「完全性の構想」(a vision of completeness)を形成しているのである。

イエイツは、[1938 年] 2 月 17 日に Ethel Mannin 宛^{註(18)}に I have begun writing from this new subject matter. と書き送った。彼の *annus mirabilis* といわれた初めのころであり、新しい主題とは、パンフレットの形で‘*On the Boiler*’のことを指すようである。このなかにイエイツが述べることに反抗する友人がいて彼は意気消沈し自分の述べることが役立たずではないかと懸念した。

しかし、‘*On the Boiler*’は‘a long exploration of my conviction, or instincts’であった。ここで新たな完成への創造的苦悶の「選択」‘*The Choice*’が感じとられるであろう。

THE CHOICE

The intellect of man is forced to choose
Perfection of the life, or of the work,
And if it take the second must refuse
A heavenly mansion, raging in the dark.
When all that story's finished, what's the news ?
In luck or out the toil has left its mark:
That old perplexity an empty purse,
Or the day's vanity, the night's remorse.

注

- (1) Jon Stallworthy: *Yeats: Last Poems*, Macmillan, 1968, p.44.
- (2) Jon Stallworthy: *Ibid.* p.77.
- (3) T. R. Henn: *The Lonely Tower*, Methuen, 1965, p.335.
- (4) Harold Bloom: *Yeats*, Oxford, 1970, p.460.
- (5) Phillip L. Marcus: *Yeats and Artistic Power*, Macmillan, 1992, p.2.
- (6) W. B. Yeats: *Essays and Introductions*, Macmillan, 1961, p.508.
- (7) Daniel Albright: *W. B. Yeats: The Poms*, Dent, 1990, p.808.
- (8) W. B. Yeats: *Explorations*, Macmillan, 1962, p.417.
- (9) Allan Wade: *The Letters of W. B. Yeats*, Rupert Hart-Davis, 1954, p.992.
- (10) Allan Wade: *Ibid.* p.915.
- (11) *Letters on Poetry from Yeats to Dorothy Wellesley*, Oxford, 1964, pp.184-8.
- (12) Allan Wade: *Ibid.* p.914.
- (13) Jon Stallworthy: *Between the Lines*, Oxford, 1963, p.6.
- (14) W. B. Yeats: *Essays and Introductions*, p.518.
- (15) W. B. Yeats: *Explorations*, p.442.
- (16) W. B. Yeats: *Essays and Introductions*, p.526.
- (17) W. B. Yeats: *Explorations*, p.345.
- (18) Allan Wade: *Ibid.* P.904.

とくに、つぎの文献に負うところが大きかった。

1. W. B. Yeats: *Essays and Introductions*, Macmillan, 1961.
2. A. N. Jeffares: *A New Commentary on the Poems of W. B. Yeats*, Macmillan, 1984.
3. D. A. Albright: *W.B. Yeats The Poems*, Dent, 1990.
4. 鈴木弘訳：W. B. イェイツ全詩集，北星堂，1982.